# がえんぜない

## 一

怒鳴り声が聞える。何事かと思った。扉を開けた声の主は、まっすぐ、こちらへ向う。十波は後を向いた。

「お前だ」

主任の宮沢が、眼前に立つ。十波は目を合せた。宮沢の口から、唾が飛ぶのが見えた。

「雑な仕事しやがって」

耳を塞ぎたくなる様な声量だったが、塞ぐと、十分は、叱言が長くなるので控えた。宮沢は背が高く、威圧的な目と眉をしているので、怖い。大きい声も脅威だった。鬱憤を晴らす相手が、自分ぐらいしか、いないのだろう。十波は憐れんだ。宮沢は持って来た書類を指して具體的な問題点を挙げた。十波は書類を見て小刻みに頷突いた。

「お前何年やってんだ」

十波ははと不細工に笑った。返答が思い付かなかったので、笑った。「八年です」と恬然とした様子で述べ立ててやろうと思った時、宮沢はすでに室を出ていた。

「宮沢はだめだよ」

十波は酒を呷った。酒に強くないので、呷った割には、少量しか減らない。木張りで體裁丈は整のえてある店内は、明るく、騒しかった。安価な店なので、大学生も多い。対いに座った女の子は、窮窟そうに身體をもじつかせた。

「あいつには跟いて行かない方がいい」

女の子は合槌も頷突きもしなかった。代りに時計を見た。其後で

こちらを見るが、直視するので、十波は視線を落した。壁と同様テーブルも沢のない木で拵らえられており、余り有難い印象は与えない。十波はこれらに対して安っぽいと感じるより、安心を覚えた。数年前に女の子と行った高級なバーは、暗く、空間が広々としていて、メニューには値段が書いていなかった。平生なら女の子にはなるべく沢山飲んで、泥酔して欲しいと望む十波も、女の子が一杯頼む度、気を揉んだ。店員まで洒落ているのが不快だった。こちらを見下した態度が鼻に付いた。会計をした時ホテル代が辛うじて残りほっとした。そうしてここまで金を掛けたのだからと欲が膨れ上った瞬間、女の子はさっと帰った。

「あれ、先輩、さっきからお酒減ってないですよお」

トイレから戻った中尾が朗らかに言った。気詰りだった十波はほっとした。口も緩んだ。

「中尾ちゃん、遅かったね、何してたの」

「何って、トイレですけど」

中尾は座りながら答えて店員を呼ぶ。

「すいません、梅酒のソーダ割。希美ちゃんは」

「私も同じのを」

中尾の言葉で、対いの子が希美子という名前だったと思い出す。

「中居、希美子ちゃんだよね」

「そうですけど」

「いや、ごめんごめん、おれ他の名前覚えるの苦手だからさ」

希美子は又合槌も頷突きもしなかった。話しを広げるのが下手な子だなと思う。社会人になって日が浅いとは言え、これでうまくやっていけるのだろうか。十波は仕方なしに中尾へ向った。

「余まり中尾ちゃんが遅いもんだからさ、トイレで怪しいことしてるのかと想像しちゃったよ」

「やだ先輩、それって噂のセクハラってやつですかあ。どうしよう希美ちゃん、社会人になって初のセクハラ。これが社会の洗礼ってやつかなあ」

「通るべき道なんだよ、ファイト紗奈ちゃん」

「ぎゃー恐しい程他事。先輩聞いて下さいよお、私中尾でこの子中居でしょ、新入社員で研修した時、名前が近いから同じグループになったりして一番初めに仲好くなったのがこの子なんですよ。かわいいねーかわいいねーって私が最大級の愛情を示して上げてるのに、いつもこの態度、非どいと思いません？」

「暑苦しい」

二人はぎゃあぎゃあと喋舌った。中尾と一緒だったら喋舌るんだなと思って希美子らを見た。二人とも可愛いくはない。顔立だったら、まあ希美子が上か。しかし背が低く、胸もお尻も小さかった。対して中尾は、多少豊かすぎる肉付をしていた。欲情するのがどちらかと言えば中尾だな。性格も与し易い。十波は叶うなら今日セックスをしたかった。恋人は学生時代にいた限だ。店には行って発散することも有るが、薄給の所為で月に二回行くのが限度だ。生身の女で、素人で、できれば、ゴムも付けずに好き放題したかった。おれが犯罪に走るのを防げるなら安いものだろうと思う。十波は景気付けにぐいと飲む。二人の酔い具合を確めて、店員を呼び「お勘定」と言う。

「一人三千円だね」

伝票を見ると九千円だったので三で割る。これだけ飲めて三千円だったら安いものだ、思って伝票を見直ししまったと思う。九千四百円だったので、三千二百円と言って置けば、自分はきっかり三千円で済んだ。しかし後から言うと吝嗇いと思われるので、代りに大袈裟に小銭入れをまさぐった。

「ああ、細かいのはおれが出しておくから」

「ありがとうございまーす」

中尾は言うのに希美子は言わない。不快に思ったが、これで中尾に好印象を与えられただろうと思う。女の子にはこう言った小さなポイントの積み重ねが有効なのだと、インターネットの記事で読んだ。十波はお釣りを受け取りわざともたついた様子で財布に入れ

「中尾ちゃん」と小声で呼んだ。

「はい」

ちらと見ると希美子はすでに外へ出ている。チャンスだと思うと下半身に血が集まった。期待でもう堪らなくなる。

「この後二人でもう一軒行かない」

「あ、うち親が厳しいんでもう帰らないとーごめんなさい」

足早に外へ向う中尾を見て失望する。やっぱりあいつも其所いらの女と一緒か。今日投資した金は無駄だったな。そう言えば店員がそこそこ可愛かったが誘ったら来ないかな。目当ての店員はいたが声を掛け様か迷児ついている隙に接客しに奥へ消えた。タイミングの悪い女だ。扉を開けて外へ出る。

二人がすぐ脇で何か狐鼠々々話している。中尾が希美子に何か渡した。中尾がこちらに気付く。

「じゃあ先輩、今日はどうも有難うございました」

「同じ駅だろ、そこまで一緒に行こうよ」

「あ、はい」

歩き出すと二人はぴったり不離て依然話している。通りは一杯飲んだ人達で賑っている。どうしてこんなに大勢の人間がいるのに、おれにはいいことが巡って来ないんだろう。十波は考えた。もう一度くらい誘ってみる価値はあるかな。女の子は男からしつこいぐらい誘われるのを待っていると言う。おれはどうしてもきょうしたい。しかし中尾と希美子は一個の塊まりになっている。十波は中尾の胸の膨らみを見た。

中尾とは電車が別方向だった。十波は落胆し、希美子と又気詰りな時間を過した。幸い電車は程なくして来た。それ程混んでいない。十波は隣りに立つ希美子に喋舌り掛けた。

「そう言えばさっき中尾ちゃんから何か渡されてなかった」

「防犯ブザーです」

「ふうん、今物騒だし女の子は危ないもんねえ」

電車は揺れて振動が伝わる。地下を走っていた電車はやがて地上

へ出た。車内では時々話し声が聞え、やむ。家に帰ったらもう一杯飲もうかな。考えていると声が聞えた。

「人間は自分を尊敬すべきだと言った人がいます。まだ何もしていない、経験も、実績もない自分を尊敬してあげれば、それに背く様な、恥しいことはしないという考えの様です。根拠のない悪口や、人を不快にする軽口、言動は慎しむ様になる。そうなったらいいですね」

「それ大学で勉強したの」

「はい」

「社会人になったら本なんか忙しくて読まなくなるよ。おれも昔は大分読んだけど――」

電車は着き、人が降りて、乗った。席が一つ空いたので座ればと言うと、先輩なんですからどうぞと言う。あ、そうと言って座り眼をつむった。「自尊心のことじゃない」という声が聞えた。目を醒ますと、希美子はすでにいなかった。丁度自分の降りる駅だったので、慌てて飛び降りた。

## 二

「あっっり得ないでしょ」

思わず受話器から耳を離す。紗奈は興奮すると声が大きくなる。頭蓋を揺らされた様でくらくらした。

「ですよね」

「ですだよ。話は詰らないけちだわ不細工だわ仕事も聞いた？有り得ないぐらい出来ないらしいよ。背も低いし清潔感ゼロだし口も臭そう腋も臭そう抱かれたくない男ナンバーワンだよ。私はあの日のこと生涯で一番の汚点だと思ってるんだからね」

希美子は「あの日のこと」を反想した。初めて十波に誘われて飲みに行った日のことだ。不愉快な思いしかしなかった。帰る方角が一所だということで、紗奈は防犯ブザーさえ希美子に持たせた。「万

が一の時はこれ鳴らすんだよ。同じ職場の先輩だとか一切関係ないものだと思いな。危ない奴は世界に沢山いるからね」紗奈は時々論理を略したことを言う。「世界に沢山いる」の世界とは、一體どこの世界のことなのか。其点を追窮せずに言っているのではと疑うう。

「わかった」疑問を秘して答えた自分が、年を取ったなと思う。昔しは、どこで誰であろうと、疑問を打衝けた。なぜ左う思ったのか、どういう論理を辿ったのか、もしかして、聞えがいいという理由丈で、「世界」という言葉を選んではいないか。打衝けて、いつも、疎まれた。

きょうの、仕事の休み時間中、一人で本を読んでいると十波が近いてきた。

「中居ちゃん」

上の名前にしろ、下の名前にしろ、どうしてちゃん付けしなければ気が済まないのだろう。顔をしかめ、返事はせず、目だけ上げる。

「きょう又飲みに行こうよ、中尾ちゃんも誘ってさ、仲好し三人組でさ」

「きょうは用事があります」

言うと、十波はくねくねする。

「それは残念だな〜。じゃあ明日は。ね、ね、明日、中尾紗奈ちゃんにも聞いておいてね」

くねくねした儘去って行った。夫で夜、電話で聞いて見ると、紗奈は激昂した。

「先輩として奢ってくれるなら未だしもだよ（いや、今となっては夫でも絶対嫌だけど）金は自分で出す不愉快な思いはするでメリット一つもないじゃん。やめときなやめときな。行ったら絶対に後悔するよ。私はぜっっ対に行かないって夫丈は伝えといてね」

声を掛けられたのが自分だから仕方ないが、夫程断然お断りするのは少しく気が重かった。しかし、自分としても、紗奈と意を異にしている訳でないので、是も仕方がない。責めて自分から断わりに

は行かず、相手から来た時のみ謝絶しようと思っていたら、十波は翌日朝一番に来た。

「じゃあ、今日、会社出たとこで待ち合せね」

「紗奈ちゃんがだめだそうです。ごめんなさい」

「えーそうかー残念だなあ。じゃあ今日は二人でよろしく」

十波は去って行った。二人でよろしくと言うのは、私と、紗奈で、よろしくやってくれと言う事だろうか。希美子は茫と考えていたが、十波と二人になるけれどもよろしく頼むという意味にも思い当り、愕然とした。十波に確然と答えなければと探すと、部長が「おはようございまーす」と大声で挨拶を始めた。

一度機を逃すと、なかなか自分から断わりに行けなかった。休み時間もあったが、まず自分から十波の許迄行くのが癪だし、どこへ行っているのか休みが終るまで十波は戻って来なかった。嫌な気分が仕事の妨たげになった。私は、紗奈の様に、奢ってもらうのが当然とは思わないから、自分が飲んだ以上お金を払うのは、いい。しかし、不愉快な思いをして、更にお金まで支払うのは、たしかに愉快でない。そもそも二人でよろしくというのが別な意味である可能性もある。二人揃った時には宜しく頼むよ、という意味にも、取れるがしかし夫だと今日はと言った意味が分らない。希美子は先輩に呼ばれた事に気付かず怒られた。

とに角今日は無視して帰ろう。夫で、明日、何か言われたら何とか蚊とか胡麻化せばいい。希美子は元来片付の遅い方でしかも同期の子に話し懸けられ帰るのに随分手間取った。夫でも彼女としてはできる限り迅速に帰った。会社を出る時には下を向いて顔を上げない様にする。希美子の属する支社だけでも百人以上は働らいている会社なので、何とか紛れないかと思う。紛れなかった。

「おせえぞ」

「すみません」

小さい身體を更に小さくしたのに意味がなかった。顔を上げると、十波がいる。後ろには交通量の多い、幅の広い道路があり、まだ暗

くはないがライトを点けた車が目立つ。仕方ないかと観念した。早めに帰ろう。希美子は歩き出した。

「早いんですね」

「仕事ができない奴は片付け遅いんだよ。おれなんか五分前には終らせて、最後の五分は茫っとしてるよ」

「早過ぎて仕事ができないということはないんですか」

「ないね、おれの経験上」

希美子は帰りたくなった。腹痛を起したことにするのはどうだろう。ひと先ず、お腹をさすってみる。異常が生じた様に見えないだろうか、このサインを受け取ってはくれないだろうか。希美子はさすった儘歩いた。

席に着いても折に触れてさすった。時計を何度も見る。十波は携帯をいじっている。と思ったらちらりとこちらを見た。

「生理か」

「違います」

言った所で酒が来た。こんなに気まずい乾杯をしたのは始めてだった。酒がまずい。もともと好きでないが、席を共にする相手によって味が変るというのは発見だった。

「ねえ、ねえ、〇〇ちゃん彼氏いないんでしょ」

「いませんよお、全然縁がなくって」

「うそだー、〇〇ちゃんこんな可愛いのに、もてない訳がないでしょ」

「ちょっと、ほめても何もでませんよ。××さんこそ、彼女とどうなんですか」

「彼女？　ああだめだめ。〇〇ちゃんとは可愛さが天と地の差だもん。指一本取っても造りが違うって、一寸待って、何これちょっと待ってよく見せて。彫刻？　白くてきめが細やかで一回触ったら手が離れてくれないんですけど。これ指？　それとも天使の羽？はたまた悪魔の誘惑か……」

「何言ってるか全然わかんない。××さん超おもしろい」

隣りの席からきゃあきゃあと声が聞えて、希美子は、低俗だなと思った。あんな論理の通わない見え透いた世辞を言われて、どうしてああ喜こべるだろう。夫とも表面上喜んでいる丈で、本心では下らないと思っているのだろうか。希美子は其見え透いた世辞を言われた事がないので、其所迄踏み込んで考えることが出来なかった。

「うらやましいな」

「え」

「となりのカップルだよ。男が散々口説こうとしてるじゃん。おれは、そんなに口がうまい方じゃないから、ああいう風に女の子を口説けたらもっと人生変ってたかなって思うこと時々あるよ」

希美子は合槌も頷突きもしなかった。下らない人生から、下らない人生に変る丈じゃないですか、という言葉を堪えた。十波が傷くことを怖れた、と言うより、自分が、他の人生を、下らないと断じ得る丈の充足を得ているかという、疑問が湧いた為だった。更に怖れたというなら、其言葉を口にすることによって、言逆いが生れ、其反照として自分が傷くこと、又、其先の気詰り、詫まるか詫まらないかという面倒な逡巡、をこそ怖れた。

言うか言わぬか迷ったので、結果として何の反応も示さず十波を凝と見た。十波は目を泳がして酒を飲んだ。この日、二時間いて、話したのはこの他二言か三言だった。おかげで酒が進まず、食も進まず、安く済んだ。

## 三

「面白いじゃん、それ」

「何も面白くない」

慍として答える。絵美莉はけたけたと笑う。昼。絵美莉がお茶しようと誘って来たので、出て来た。道路を挟んですぐ公園が見えるカフェなので、緑が濃く映える。

と言っても、雨が降るという予報だった。オープンテラスに座る

のは不安だと言うと、今はまだ降っていないと押し切られた。
絵美莉は大学の時の同級生で、卒業して、就職してからも、定期的に逢っているのは彼女だけだ。就職と言っても、そこそこ大手の事務職として働らく希美子と違い、彼女は家業を手伝っている。「私は取締役だぞ」絵美莉はエヘンと胸を張った。
「すごいじゃん」
「いや、まともに受けないでよ。生意気だぞ、とかその鼻へし折ってやる、とか、まあそれはいいんだけど小さい会社だからね、全然すごくなんかないからね」
「え、でも、取締役って響きがなんかすごそう」
「お父さんが社長で、私がいて、従業員が一人いるだけだよ。そりゃ取締役にもなるわ」
「ふーん、でも、そんな状態でよく出逢いがあるね」
「出逢いは作るものだ」
絵美莉は胸を張った。希美子は、左んなものかなと思う。希美子には、恋人がいたことがない。欲しいとも思わない。と、いう嘘を、自分にも、他人にも、告くことがある。嘘ではない。自問し答える。理解り合い、認め合うことができる、男の人だったら、けんかしてもいい、恰好よくなくてもいい、一緒に、いてもいいと思う。ではそのけんかとはどのようなものか。かっこうよくないのは、具體的に、どこまで免せるのか。そこ迄はまだ解剖していないので確答し兼ねる。
希美子は紅茶を飲んだ。空は、曇りで、今にも降り出しそうだ。なのに公園にはよく人が出入する。桜はとっくに散った。あじさいも、枯れ始める頃だろう。あの人達は何を観に来ているのか。カップルばかりが目立つ行人を眺める。
絵美莉がニヤニヤしていた。思わず言う。
「なんだよ」
「希美子ちゃんも、彼氏が欲しくなってきたんじゃないの」
「なんでだよ」

「物欲しそうな目でカップルを見ちゃってさ、その先輩と、来たらいいじゃないか」
「先輩の話しはしないで下さい」
「いやー大学の時から考えたら大いなる一歩だと思うんだけどなー、希美子が男の人と二人でお酒を飲むなんて」
「進歩じゃなく退歩ならその一歩には価値がない」
「進歩の裏側はいつでも退歩であると言った人がいるよ。じゃあ退歩の裏は進歩、一歩は一歩じゃないか」
「そんなどっかの胡散臭いおっさんの一言なんて信じられません。夫に、私、男の人と二人でお酒飲むの始めてじゃないからね」
「昇くんのことか」
希美子はぐっと言葉に詰った。恨めしそうに絵美莉を見る。
「ほら、その気まずそうな顔をするのがいい証拠だよ。昇くんなんてもう何年前の話しだよ。二年？　三年？　二十歳ぐらいの時でしょう。もしあんたが一人でも他の人に恋してたら昇くんのことなんかどうでもよくなってるよ。ああ、そんなことあったねえってしみじみした顔でいってる。傷心を癒すのは時間じゃないよ、新しい恋だ。惚れっぽくたって何だって誰か別の人を好きになればいいんだよ。なったっていいんだよ。好きにならなきゃ、何年経っても、忘れられずにいるよ」
「私は……私が、好きになった訳じゃない」
希美子はやっと苦々しく言った。紅茶のカップは冷めていた。絵美莉は、実際、恋人のいない時間がないぐらい恋愛をしていて、言葉には経験という重味が圧しかかっている気がした。たしかに、そうかもしれない。でもそうじゃないかもしれない。反論ができなかったから、肯定も、したくなかった。しかしその葛藤は言葉に表わせなかった。
「だから、その先輩もさ、最初は気に入らないかもしれないけど、何度か飲みに行ったらいい所が見付かるかもしれないよ。私もこいつ最低、こいつだけは絶対ない、と思ってた男と付き合ったらすっ

ごく優しかったことあるし」
「どうして其人とは別れたの」
「優しかったのは最初だけで、結局最低だったから」
希美子は思わず苦笑した。その横を救急車が通るが、誰も見ない。

四

「じゃあ、付き合っちゃえばいいじゃん」
飯島がいつもの下品な声で笑う。太っていて、大声で笑うので、暑苦しい。
「なんか気分がのらないんだよ。お子様体型で、ムラムラしないしさ。相手が告白してきたら、考えるけど」
「彼氏いるんじゃねえの」
「いやあいないね。あの性格で彼氏いるなんて考えらんねえよ。話しは下手だし愛嬌もないし、彼氏いたことねえんじゃねえかな」
十波は答えたがしかし直接希美子に聞いたことはなかった。聞こうと思ったことは何度かある。だからと言って、「彼氏いんの」なんて口にすれば、自分が希美子のことを狙っているなんて勘違いをされはしないかという、自意識が邪魔をし遂に聞いていない。
「選り好みできる顔かよ」
飯島が一段下品に笑った。飯島は、黒い髪をだらしなく伸ばしており、先述したが太っており、仮に夫ら悪条件を除外しても不男だ。自分のめがねに自分の唾液が飛んでいる。十波は慍としてトイレに立った。だと言うのに矢鱈と容姿のことを話頭に出すのはどういう訳だろう。コンプレックスの裏返しか、自分で気づいていないのか。思い至り十波はぞっとした。あの顔で、気づいていないのは、悲劇としか言い様がない。可哀想だ。十波は飯島を憐れんだ。
小用を足すと、水を流し、鏡を見て髪を整える。最上級ではないが、まあ並以下ではないだろう。自分の容姿に客観的な評価を下す。少くとも、飯島とは比べるべくもない。真ん中で分けた髪を、何

度も分け直す。「ナルシシストだね」不意に、学生時代に付き合っていた女性を思い出す。

「ナルシストだろ、学がないな」

「別に、どっちでもいいけど、自分のこと大好きなんでしょ」

「むしろ大嫌いだね。殺したい程憎んでる」

彼女はアハといった。「殺したい程憎んでる」独語いて室を出て行った。その内戻ってくるだろうと思ったら来なかった。大学で会っても、頑なに視線を避けられた。こどもだなと十波は思った。詫まってきたら、許してやるか。詫まりに来なかった。飯島にどうして別れたのか聞かれた。「価値観の相違ってやつかな」飯島は下品に笑った。

飯島は、十波の室で、ゲームをしている。華やかな音楽が聞え、光の明滅が、壁の色を目眩ぐるしく変える。一人暮しの狭い室。自分の家、誰にも、ペースを、乱されない。でもペースを守れない。飯島が来たから、きょうは朝までゲームだろう。一人よりはましだ。つぶやいたのか、考えただけか、わからない。

## 五

「おれはいいよ」と言ったのは、飢えていると思われたくなかったからだ。竹は「人数足りないんですよ」となおも言った。

「十波さん、そんな潤おいのある生活してないでしょ。もう三十なんだから、結婚相手の候補だけでも見付けないと手遅れになりますよ」

十波は受話器越しに慍とした。睨む相手がいないので、自室の壁を睨む。

「おれは結婚しないよ」

「あいたた、十波さん、夫はもてる人のための言葉ですよ。ね、まずはもてましょう。其様なこと言うのはもててからでいいじゃないですか。おれと一所に合コン行って、一花咲かせて、結婚なんて

クソだって語り明かしましょう」

十波が一旦断わったのは體裁の為で、断わった後は、是非にも渋々という體で行きたかった。然し一旦断わると、何故か行くと言いづらかった。竹が無暗に誘うので尚更だった。

「わかった、わかった、ああ、じゃあ、一花咲かせるか」

「左右ですよ枯木に花を咲かせましょう」

どうして余計な一言を付け加えずにはいられないのだろうと思う。十波は最後も慍としながら電話を切った。誰が枯木だ。夫に、まだ三十にはなっていない。しかし、三十までに、彼女は欲しい。

「竹は大学の時の後輩でさ、まあ、その時からこう、失礼っていうか、一言多いっていうか、君達も見てればわかるでしょ。おれが卒業してから一、二、三、四、五、六、七、八年だから、竹が卒業して六年ぐらい？　二十八ぐらい？　夫なのに全然落ち着かないんだよね、あれ二十七ぐらい？」

「十波さんほんとに話しつまらないっすねー」

言われて十波は慍とした。本当に、こいつは、空気が読めない。しかし斜め前にいる女の子は下を向いて笑いを堪えていた。正面の子は苦笑している。十波は酒を飲んだ。ただ、竹の不快さを勘定に入れても、詰る所は上機嫌と言えた。合コンなんて久し振りだ。右を見ても左を見ても女の子がいる。顔のレベルとしてはみんな中の上から中の下ぐらいだが、斜め前の第一希望の子が豊満な身體付きをしていた。歳を取るにつれて、顔よりも身體を見る様になってきた。四人掛の席が二つあり、男二人女二人ずつ座っている。飯島の下品な笑い声が聞えた。

「じゃあ聞いちゃおっかなー、ずばり、二人は彼氏いるんですか」

「いないいない、いたら今日来ないって」

「そうだよー竹ピはどうなの」

「おれ？　いる訳ないじゃーんもしいてもこんなかわいい子達と出会えたんだから今日別れるよ。えーじゃあ最後に彼氏がいたのはいつ頃」

十波のテーブルが十波抜きで盛り上り始めたので十波は不満だった。熱心に聞く佯をして頷突いて見たり、超然と酒を飲んで明後日の方角を見たりしたがどれも験はなかった。不満な十波はトイレに立った。

明るく、騒しい店内は如何にもチェーン店という風だった。おれが幹事だったらこんな店は選ばないな。思った十波にしかし具體的な案はない。其上十波はトイレに行くさえ迷った。

「トイレはこっちだよ、トナミさん」

見ると飯島の対いに座っていた女の子がいた。自己紹介し合ったので何となく名前は覚えている。十波は故意ともたついた。

「えーっと、エ、エ、……」

「エミリ」

「そう！　エミリちゃん。ごめんねえおれ他の名前覚えるの苦手で」

十波はニヤニヤしながら言ったが絵美莉が大声で笑うので遮ぎられた。なぜ笑っているのかわからず茫とする。絵美莉は目尻を押えて言った。

「トナミさん、それは仲々硬派な心掛だけど、女の子はちゃんと名前を覚えて上げた方が喜こぶかもしれないよ」

十波はふうんと思った。左んなもんかな。「聞いてたのと同じこと言った」絵美莉は言うが十波には何の事か分らない。「トナミさん、トナミさんが勤めてるのって彙然って会社でしょ」十波は驚ろいた。

「あれ、おれ会社のこと言ったっけ」

「いや、知ってたんだよ。中居希美子って知らない？　あれ、私の友達」

「え、あ、中居、さんの友達？　ほんとに？」

「なんだよ中居さんなんて改たまっちゃってー平生なんて呼んでるんだよー」

十波は改ためて絵美莉を見た。洋服は垢抜けており、背が高く（自

分より高いかもしれない）整った顔をしている。きょう集まった女の子で一番可愛いのが絵美莉だろう。話し方も気咲で希美子と仲がいい様には思われない。十波は不思議の感で絵美莉を眺めた。

尿意を思い出したので十波はトイレに向った。座に戻ると、いつの間にか席が変っている。十波がいた場所には、竹の友達の金田君が座っていた。空いているのは飯島の隣りだが飯島はゲームの話しを熱く語っていた。相手の女の子（たしかナツという名前だった）はふんふん聞いているが時折ちらりと盛り上っている隣りのテーブルを見る。やめておけばいいのに。十波は思ったが言わずに空席に着いた。

間を置かずに絵美莉が戻り、同時に飯島がトイレに立つ。飯島の姿が見えなくなった瞬間絵美莉はナツちゃんを隣りのテーブルへ促がした。ナツちゃんは感謝を示すために片手で拝む様にして椅子をずらし金田君の隣りに座る。夫らの動作を茫と見ていた十波は絵美莉の「トナミさん」という声と奥へずれろという手振でようやく移動した。

「え、今の、何だったの」言おうとした十波よりも先に絵美莉が喋舌った。

「ね、ね、希美子とは、どれぐらいのペースで飲みに行ってるの」

「え、どれぐらい、週に一回か、多くて二回ぐらいのペースじゃないかな、最近は」

「どっちから誘うの」

「まあおれかな、うん、一回、一回ぐらいはあっちから誘ってきたこともあったかな、もっとかな」

「何て呼んでるの」

「中居、かな。ていうかお前とか？　そう言われるとあんまり呼んだことないかも」

「なんだよーお前なんて彼氏気取りかよーいやーんおばちゃん火照ってきちゃう。でも最初はちゃん付けで呼んでるとか聞いたけど、今は違うんだね」

「や、最初は気を遣ってたというか、段々めんどうになってきたというか……」

次々に質問されるので、十波は夫に答えていればよかった。自分が中心として話せるということに、喜こびを感じた。疎外されるのは嫌だ。自分が何も悪いことをしていないのに、なぜ疎外されなければいけないのか。ではいいことをしたのか？　他が自分を中心としてくれるようなものを、感情を、他に与えたか。なぜ与える必要がある。自分は、自分なのだから、世界に一つなのだから、中心にいるべきなのじゃないか。違うのか？

飯島はすでに戻ってきていたが、隣りのテーブルは盛り上っており、こちらのテーブルは十波と絵美莉が話し込んでおり、一人酒を飲んでいた。ゲームの話しなんてするからだ。十波は、飯島の疎外と其源因を、そう結論づけた。

酒が進むとトイレが近くなる。酒の弱い十波は、強たかに酔っていた。朦朧とした意識でトイレに向い、遠くで声を聞いた。

「お前が連れてきたあの二人、なんだよ。最低じゃねえか」

「いや、今回はほんとにどうしようもなく集まんなかったんだよ。奥の手、悪い意味でね」

「ぶはは、悪すぎだろ。オタクのデブに根暗な矮躯。顔も悪けりゃ口も下手ってか」

「そう、まさに奥の手。日の光の当らない奥の奥から引っ張り出してきたんだから。あそこまで非どいのなかなかいないよ？」

「ぶはは、違いない。とにかく二次会はあの二人抜きで行くからな」

「当然」

お会計の段になると、十波は年長者ということで突然竹におだてられた。周りが夫に便乗する。十波は酔っていたので大分気が大きくなっていた。女の子のいる手前もあるので五千円を支払う。竹

はありがとうございますと一旦拝む様に押し戴いたが、不審気に札を覗き込み、指で何度か弾いた後、天井の照明で透かし見た。

「十波さん、もし、もしもですよ。もしぼくのこの目に狂いがなかったら、この方、女性ですよね。似合わしくないなー、十波さんの貫禄で女性っていうのは非常に似合わしくない。十波さん！　男の貫禄をここにいる雌豚どもに見せてやりましょう」

女性陣は「ひどーい」「おすぶた」など口々に異論を述べたが十波がもう一万円を差し出すと途端に拍手が起った。「すごーい」「ごちそう様でーす」竹はそれでも譲らず「十波さんもう一声」と迫ってきた。

店の外に出ると竹は「解散」と叫び、「おれ達は十波さんのようになるべく男二人で反省会します」と言って金田君とどこかへ消えた。女の子も、「私達もこの辺で」とそそくさと消える。その前にまた少しだけ絵美莉と話せた。そういえば希美子はと聞くと答えた。

「きょうは会社の飲み会だって言ってたよ。十波さん、部の飲み会より合コンを選ぶなんてなかなか浮華いね」

十波は知らなかった。知っていれば、行っただろうか。

どこへ？　二次会へ？

## 六

「ふうん」

絵美莉はニヤニヤした。希美子は恥しがってこちらを見ない。ますますいじめたくなった。

「なんて人」

「甲斐さんって人。違う部らしい。誰が呼んだかわかんないけど」

「どんな人」

「どちらかと言うと、派手めの人かな。茶髪で髪も長いし」

「会社は茶髪大丈夫なの」

「ほかの人に比べたら明るいって程度だよ。長さもそう」

「で、かっこいいの」

「いや、まあ、あの」希美子は服を取っては戻す。「かっこ、よかったかな。私から見たらだけどね。私の主観だけどね」

「で、そのかっこいい派手めの甲斐さんに口説かれたと」

「く」希美子の手の動きが早まった。「くどかれたとかそんなんじゃないけど。ただ飲みに行こうって誘われただけですけど」耳が真っかだ。

二人で買い物に来ていた。希美子から誘いが来ることなど滅多にないので何かあるなと思っていたが、案の定面白い話しをもっていた。先日行った会社の飲み会で甲斐さんという人に口説かれたらしい。

「でも別の部なら面識なかったんでしょ。何がきっかけで話し始めたの」

「いや、私、最初同期の子と、ポンちゃんって子と話してたんだけど、ポンちゃんがトイレに立ったらその甲斐さんがとなりに来てさ、『こことなりに座るね』って座っちゃったの。『そこ友達の席です』って言ったら『あっしまった！』って驚ろいてそのまま話し続けるから失礼な人だなあって最初思ったよ。助け求めようとしてポンちゃん見たら別のテーブルで話し込んでるし、ああどうしようと思ってたんだけどなんか、結構、面白い人で、夫からずっと話ししてた。夫で帰り際に番号聞かれて、『今度仕事帰りに二人で飲み行こうよ』って誘われて」

「行きますにゃんにゃんと言ったと」

「言うかそんなもん。や、不意だったし、返事出てこなくて、考えておきますと答えてしまった」

ふうん。絵美莉は唸って希美子を見た。平生買い物に行く時は二人で別々に好きな店へ行くが、今日は絵美莉の行く店行く店へ跟いてきた。いつもは意見を聞きたくても近くにいないことを考えると可笑しい。よっぽど話しを聞いて欲しいのだろう。でも夫なら買い物じゃなくてお茶しようと言えばいいのに。お茶だけで誘い出すの

も悪いと考えているのだろう希美子をかわいく思った。
「保留にしたのは、どうしてなの。その人何か嫌な感じした」
「いや全然」
「じゃあ行ってみればいいじゃない。私だったらホイホイ行くけどなあ、会って話すのが一番その人のことわかるからね。ナンパされたとかだったら警戒もした方がいいけど、会社の人ならそう度外れに非どいことされる心配ないと思うよ」
希美子はうーんと言って売り物の服を手当り次第に手に取って身體に合せている。考え事をする時にこういった手慰さみをするのが希美子の癖だと知っているが、明らかにブカブカな服なども上の空で身體に合せるのが可笑しかった。あんたいつも一番小さいサイズ買うでしょ。思ったが堪えた。
「希美子くんは何か思い悩んでいるようなので、整理をしてみましょう。まず甲斐さんのことは嫌いではない、不快な感じはしない。これはどうですか」
「はい」
「魅力的だと思う」
「魅力、うーん……格別惹き付けられる、という感じがする訳でもないかなあ」
「（回りくどいな）変なことされそうで怖い」
「いや、それは、しなさそうな感じがしました」
「逆に好きになっちゃいそうで怖い」
「好き、うーん……好き、になるかなあ、百パーセントならないとは言えないけれども」
「十波さんに申し訳ない」
「え、なんで。なんで十波さん」
「いやよく飲み行ってるじゃん。だから、なんとなく申し訳ないような気もちでいるのかなあと」
「え、いやああの人関係ないでしょ。だって、あの人、ねえ。私のこと好きでもないだろうし私も好きでもなんでもないし」

「十波さんが好きだ」
「あり得ません。夫は百パーセントであり得ません」
「十波さんが嫌いだ」
「いや、嫌いでは、なくなったけど……最初に比べたら。でもあの人いいとこ探す方が難かしいよ。まあ悪い人ではないけど」
十波の話しになった一瞬だけ、希美子の服の取り遣りが早くなった。どういう気もちかは分らないが、とに角糸かながらも引っ掛りがあるのだろうと分析する。考えられるとすれば同情か。自分が去れば誰からも相手にされなくなるという様な。
「じゃあまた十波さんと飲みに行った時さ、言ってみたら。『私甲斐さんと飲みに行きます』って。夫で『あそう』とか『楽しんでこいよ』とか言われたら行く。行かない方がいいと思うとか言われたら行かない。逆でもいいけど」
「逆って？」
「『行ってこい行ってこい、これでお前もギャルの仲間入りだ』と送り出されたら行かない。『行くな。おれのそばにいろ』って告白されたら行く」
「行くんだ」
希美子がめずらしく声を上げて笑った。絵美莉はおやと思う。
「私はさ、人間同士なんてどこで誰とどうなるのか全たく分らないんだから、誰かに気兼ねすることなんてないと思うよ。チャンスなんてほんとその時に攫まえなきゃあっという間に逃げていくんだから。チャンス攫もうとして、その結果失敗して誰かに非難されるようなことがあっても、私は味方でいるよ。応援する。だからしたいようにしなよ」
「ありがと」
希美子は目の前に広げた服を見つめ、照れた様に言うとその服をレジに持って行った。試着もしていないが大丈夫なのか。

七

十波は興奮していた。鼻歌を歌い、奇妙な踊りを踊る。「人生とは何が起るか分らないものだね」自宅でなければ通報されていただろう。

「うるっせえなあ、それ何度目だよ。今アニメ見てるから静かにしろ」

「飯島君、何がアニメだ、現実を見よう。君もいつまでもフリーターなんてしてないで、ちゃんと就職して、女の子と遊び給えよ」

飯島は苛っとした。なぜ少しいいことがあったくらいで、ここまで上から言われなければならないだろう。論破したくなった。

「いや俺リーダーだからさあ、今俺やめるとあの店回らなくなるしな」

「ははは、君の代りなんてどうにでもなるよ、それよりか仕事決りましたって報告して上げた方が店長さんもよろこぶんじゃないかな」

「いやお前は店の現状知らないからそんなこと言えるんだよ。でもまあ、同伴？　ていうの？　一回店の子と食事行くことになったからって浮れすぎなんじゃねえの」

「いやいやそう言うけどね、ここまで漕ぎ付けるのには大変な労力が必要だったんだよ、まあ相手から連絡がどんどん来てぼくは夫に答えていっただけだけどね」

「そりゃ連絡はするだろ仕事なんだから。まあお前みたいなのはいいカモだよな、ちょっとメールすりゃ喜んで金落してくれるんだもん」

「ははは、おいそれは嫉妬か？　いやメールを見せてあげたいなあ、『ミンミンみたいなやさしい人に出会ったことない』だってよ、あミンミンってのはおれの仇名ね。トナミだからミンミンかあ、この目のつけ所がね、違うねやっぱり。メールもハートが凄くってさあ、見せてあげたいけど夫はプライバシーがね、おれは彼女のプライバシーも大事にしてあげたいから」

「セミみてえ」

飯島の呟きも十波には届かなかった。十波はキャバクラに嵌入っている。友人に連れられていったら嵌入ったそうだ。「お前キャバクラ行くぐらいなら風俗行くって言ってなかった」言うと「ははは人は変るんだよ。おれはキャバクラに注ぎ込む」何を言っても苛付く答えしか返ってこない。

「その子何て名前だっけ」

「サナギちゃん」

「何でサナギなの？　ふつうアゲハとか羽化してなきゃなんかおかしくない？」

「私はまだ半人前だからって意味が込めてあるらしい。謙虚だなあおれはキャバ嬢というものを誤解してたよ。あんな純な子もいるんだなあああセックスしたい。まあ今度ご飯喰べてそん次にはプライベートで遊んでって流れだな」

「そんな甘くないだろ相手は百戦錬磨だろ（知らないけど）そんなこと言って搾り取られて終りだろ」

「ふふ、まあ見てい給え。プライベートで遊ぶようになったら友達紹介してもらってお前にもいい思いを味わせてやるから」

「何それを早く言えよ。じゃあ頑張ってこいよ落してくれ」

飯島は豪快に笑った。その後は二人でアニメを見て少し泣いた。

## 八

飯島直継はよく思索に耽る。考えるべきことは世の中に多すぎる。その論理を解き明かすことが自分の役目だと彼は知っていた。

明晰にすぎる頭は、屡ば災いをもたらす。物事がわかりすぎるためだ。彼はその弊に学生の頃から苦しめられていた。彼の友人である十波一應などを見ていると、単純で、羨やましくさえ思う。十波などは大学を卒業して疑がいもせず就職し、時に思い出したようにお前も就職しろと言う。今世の中にある「常識」を疑おうとも思わ

ない。自分が疑いすぎてしまい、論理の迷宮裏で深く昏迷し続けている状況を思うと、十波のように生れてきたならどんなに楽だったろうと嘆息を禁じ得ない。

しかし人生の経験を積むに伴れ、飯島は働らくことの意義というものも又掴み得てきた。これは奇貨であったと言っていい。飯島はゲームソフトの小売店でアルバイトをしているが、店長からアルバイトをまとめるリーダーをやらないかと打診された時、当初固辞した。責任は、重荷になり、自由を束縛する羈になると其明晰な頭で察したためだ。然し店長は何度も頭を下げた。飯島としても、恩義ある店長を無下にはできなかったし、自分の日頃の働らきぶりを評価されたことが嬉しくもあった。左右して受けたバイトリーダーの地位だったが、始めると苦難の連続であった。同じアルバイトのシフト（出勤日や勤務の時間）を管理し、客からのクレームがあればまず自分が行く。売場全体の状況を把握し人員をコントロールする。多少時給は上がったが、なぜ自分が是程の負荷を負わなければならないのか、悩む日もあった。しかし同時に、彼の心には充実感も芽生えていた。働らくことの意義。自分自身が成長し、同時に社会に貢献するということ。漫然と一アルバイトでいた時には感じ得ぬことだった。飯島は職場に入る時、「おはようございまーす」と掛けるこの声が、こんなに張りのある声だったことがかつてあっただろうかと過去を顧みる。

飯島の今の悩みは、自分の後継者がいないことだった。どいつもこいつも未熟で困る。飯島は明晰なる頭と実生活とが混じり合い、一体となった凄みを猛烈に味っていた。

「いらっしゃいまへー」

張り切って上げた声は少しく噛んだ。

## 九

十波は激怒していた。その憤慨ぶりたるや滑稽な程だった。今度

という今度は免さん。腹で吼えたが本人にはまだ伝えていない。
サナギちゃんと五度食事へ行った。二人で夕飯を喰べ、倶にサナギちゃんの働らく店へ行き、そこで又痛飲するという非常に至れり尽せりのサービスだが其分金の消費は凄まじかった。おれが経済を回しているんだ。そう思い込もうとしたが預金残高の減りを見ているとそんな糊塗言は吹き飛んだ。これは早期によい方向へ持っていかないとと意気込み十波は言った。
「サナギちゃん、こんなお店の前に会うんじゃなくてさ、おれはプライベートの、有の儘のサナギちゃんに会ってみたいなあ」
サナギちゃんはくねくねした。まだミンミンのこと深く知らないしというようなことをいう。
「だからさ、二人で会って深く知っていけばいいじゃない。おれはサナギちゃんと心と心で、いや心でも体でも深く対話したいなあ」
サナギちゃんは朗らかに笑った。二人で今会って関係を深めているじゃないというようなことを言う。
四回目に食事をした時預金の危機から露骨に言った。
「サナギちゃんホテル行こう。おれもう我慢できないよホテル行こう」
サナギちゃんは又くねくねした。ごめんねお客さんと寝るの禁止されてるの。でも私いつもミンミンのこと考えてるよというような事を言った。
「だからさ、客としてじゃなくてプライベートで恋人として会えば問題ない訳でしょ。ほら二人は両思いな訳だし問題ない訳でしょ」
サナギちゃんは又笑った。ミンミン顔が必死すぎ（ほんと蝉みてえ）夫に私そんなこと言ってもミンミンは本当は紳士なんだって信じてるよ、というようなことを言った。
夫でも拝み倒して五回目の食事の時プライベートで遊びに行くこととなった。十波は雄叫びをあげ気合を漲ぎらした。サナギちゃんが休みの日で夜会うこととなった。十波は三時間早く現地に着き全たくおれって奴はと悦に入った。するとメールが来た「ごめん仕事

に呼ばれちゃった」十波は雄叫びを上げたが今度は悲しい気もちに満ちていた。

夫だけでも怒り心頭に来ていた訳だが三日後サナギちゃんから「またお店来てね」というような尋常な、自分が約束を反故にしたことなど全たく意に介していないようなメールが届き十波の怒りは天に達した。もう二度とあの店にはいかねえ。報復としては些さか小規模だが十波はサナギちゃんのメールを無視し売上に貢献しないことを決めた。

数日は怒りに任せていればよかったが、夫から後はさみしくなった。十波の仕事が終る頃には大抵サナギちゃんからのメールが届いていて、「これから仕事いく」とか「ひまだったらお店来てね」といったことが書いてあった。十波は夫に一時間か二時間かけて長いメールを返した。十波はメールに溢れ出るユーモアとウィットに富んだジョーク、随縁臨機の諧謔を込めたつまりは冗談を沢山言った。夫に対するサナギちゃんの返事は一行か二行だったが、この子は面白いという気もちをうまく表現できないんだろうと十波は思った。実際サナギちゃんは飲みに行った時ミンミンのメールほんと面白いよねー（全たく読んでねえけど）と言ったので十波は益メール作りに腐心した。

其様にサナギちゃんへのメールを作ることが日常になっていたので、夫がなくなるとさみしくなった。一人の時間が殊更に意識された。両度サナギちゃんから「ミンミンが来なくてさみしいよー」というメールが届いた時はすべてを水に流して又行こうかと迷った。思い留まったのは単に自家の経済の問題だ。夫がなければ通っただろう。十波は穴を埋める方法を考えた。酒、競馬、ゲーム、アニメ、いくつか考えていると目の前に希美子が通った。

「あ、中居ちゃん中居ちゃん」

十波はくねくねした。

「今日久しぶりに飲みに行こうよ」

「すみません今日は用事があります。仕事して下さいね」

希美子は答えて去った。あれぐらいの返答はいつものことだが久々に誘ってやったのに畜生と思った。しかし用事があるなら仕方ないかと寛容さを自分に示しその日はパチンコをして負けて帰った。

偶然用事があったのかと思っていたら、後日何度か誘っても希美子は用事と言い断わった。「最近は忙がしいのかな」というと二回目瞬きをして「すみません。ここの所立て込んでて」と言葉を濁した。

十波は休憩時間中よく喫烟所へ烟草を喫いに行った。すると以前同じ部署で働らいていた後輩が目に着いた。

「よお、めずらしいじゃん」

「あ、十波さん。お久しぶりっす」

「あれ、烟草喫うんだっけ。どうしたのこっちまで」

「いや、どうしたって言うんでもないんすけど……あ、十波さんって第四でしたっけ」

「そうだよ」

「じゃあ中居希美子って子知ってます」

「ああ、知ってる知ってる」

「おっ、じゃあどの子か一所に来て教えて下さいよ。なんか甲斐の野郎がその子と付き合い始めたらしいんすけど、恥しがってどの子か教えてくんないんすよ。あっ甲斐知ってますよね、営業第三課の」

「話したことないけど、顔は知ってる」

十波は家に帰っても関係性が呑み込めず茫とした。付き合った？甲斐と希美子が。二人の接点を想像するが何も出て来ない。

## 十

人が多い。土曜日だというのにスーツ姿の人が多くいた。駅前の家電を売る店では店員が大声で客を呼込んでいる。その声も雑踏の

音も殆んど耳に這入らなかった。すぐ後ろに歩道と車道を仕切る柵があったが、希美子は靠れもせず直立した。

甲斐と待ち合せをしていた。一番、自分が可愛いと思う服を着てきたが、どうだろうと思う。バッグを持つ手が汗ばむ。

「映画とか好き」

初めて仕事帰りに二人で飲んだ日、甲斐に訊かれた。

「映画、見なくはないですけど、美術館とか好きですね。今度も行きます」

「どこに」

「有楽町。ハンダスタ・デトっていう画家のがやるんですよ。前から見たかったので行こうかと」

「美術館は誰と行くの。誰か決った友達がいるの」

「いえ、一人で」

「一人？」

「はい」

「へえ、美術館か、俺興味はあるんだけど機会が仲々なくてさ、よければ連れて行ってくれない」

了承した時は軽い気もちだったが、日が近くにつれ強い緊張を伴なってきた。服をどうすればいいか、髪は切った方がいいか、下着のことにまで考えを致す自分が俗に染まっている気がした。しかし気になってしょうがなかった。甲斐のことを考えると、単純に、どきどきした。

待ち合せに来た甲斐はジャケットを着て爽やかな服装をしていた。背が高く、適度な細身で恰好がいいので、自分が不釣り合いではないか心細くなる。希美子は背が低い。挨拶して、並んで歩く時、時々話しながら見上げる。

よく晴れた秋の日だった。甲斐の更に上には太陽がいて、燦めく。

美術館を見る時、希美子はゆっくり歩いて一つ々々見ていくが、もし甲斐が付随いてきてぺちゃくちゃ話し掛けてきたらどうしようと思った。然し甲斐は自分のペースで見て歩いて、希美子より少し

早く見終った。展示スペースにいる間は言葉を交さなかった。出口の所で甲斐は待っていてやわらかに微笑んだ。

「よかったね」

希美子はあの絵の色合がどうだ構図がなっていないだ識者気取りで批評し出したらどうしようと思っていたので、其笑顔に打たれた。

その後はご飯を喰べに行った。又並んで歩く時手の甲がふれて、顔が熱くなった。この人と手をつないで歩くことがあるだろうかと想像した。

その日はお酒も飲まず早めに別れた。希美子ののる路線の方が遠かったが改札まで送ってくれた。「またね」とふる手を見て其指の長さを知った。希美子は頭を下げた。ホームへつづく階段を下りる時一度だけ改札を振り返ったが、甲斐はまだいてもう一度手を振った。

初めて飲みに行ってからは、もう略毎日連絡を取っていた。メールもしたし、電話することもあった。希美子は話しの下手な自分が男の人と違和感なく電話している事実をふしぎに思った。メールにしても、仮に自分が誰かと付合うことがあっても毎日細心にすることは有り得ないと思っていたので、苦笑した程だった。何を根拠にあんなこと考えていたんだろう。自分が変ったと感じた。

然し美術館へ行ってから、甲斐からの連絡が二三日途絶えた。希美子は不安になった。自分が何か失敗したか、不愉快な気もちにさせたのか苦悩して考えた。失敗して嫌われていたらどうしようと思うと自分から連絡も取れなかった。甲斐とは部署が違うので、直接も会えない。会いに行ったらなんだこいつと思われるかな、メールなら大丈夫かなと悩んだ。

三日目に意を決して自分からメールを送った。「また飲みにいきませんか」私のこと嫌いになりましたかと聞こうかと思ったが重い女と思われそうだったので控えた。甲斐はいつも返事が早いのになかなか携帯は鳴らなかった。応答がないのであんなメール送らなき

やよかったと思った。連絡がないんだから、嫌われたことぐらい自分で察しろと自分を責めた。普通の女の人だったら退き際わかるんだろうな。希美子は自分の経験のなさがすごく嫌になった。

どうしよう泣きそうと思って絵美莉に電話しようか迷った。すると手の中の携帯電話が鳴り出したので死ぬ程驚ろいた。甲斐からの電話だった。え、メールじゃなくて電話？　どうしようどうしようと焦ってでも切れちゃう切れちゃう心の用意が全たく整のわないまま通話ボタンを押した。

「はい」

「あ、希美ちゃん？」

甲斐は希美子を希美ちゃんと呼んでいた。

「はい」

「全然平気だよー飲み行こうよ。又仕事帰りでいい？」

「はい！」

一通り話して電話を切ると希美子は携帯に額を押付けた。よかった、ほんと安心した。気づくと涙がぽろぽろこぼれた。本当に不安だった、怖かった、嫌われていたらどうしようと思った。希美子は甲斐から離れ得ない自分を感じた。

電話のすぐ後甲斐と飲みに行き、告白された。希美子は始めて男の人とつき合うことになった。甲斐は一人暮しをしているので、実家暮しの希美子はよく遊びに行った。初体験も甲斐の部屋だった。叫び出す程痛いかと思っていたが、そこまでではなく、それよりも彼に抱かれているという幸福感が胸に萌した。甲斐は優しくしてくれた。好き、好き、彼の耳元で何度も叫んだ。

終った後、私、胸がないからと彼に詫まると、大きい必要なんてないよ、かわいいよと髪を撫でてくれた。身體をくっ付けて眠ると甘くやわらかな夢を見た。

「つき合ってみて、どう」

「しあわせ。こんなにしあわせでいいのかって思うぐらい」
「普段遊ぶ時とか、どうしてるの。そとで遊ぶの」
「結構、行くかな。私がどこどこ行きたいっていうと連れてってくれる」
「そっか。でも一人暮しなのはいいよねえ、お互い実家だとホテル代が高くってさ」
「ああ、あれ、やっぱり高いんだ」
「そう、する度に行く訳だからばかにならなくてね。まあ相手が一人でも時々行くけど。いいよ気分転換になって」
「上級者だな……」
「はは、今付合って一カ月？　二カ月？」
「もう、すぐ、二カ月かな。あと二週間で」
「そっか、ねえ、想像もしていなかったでしょ、たった数カ月でこんな色んなことがあるなんて」
「うん……本当に、夢にも思わなかった。ふしぎなものだね」
「本当に、人生はどこで誰とどうなるかわからないよね。ねえ、昇くんのこと」
「昇くん？」
「……」
「なんだよ、そんなに笑って」
「ほら、あんたの、『それ誰だっけ』って顔。人間はね、動いていた方がいいんだよ、どんな形であっても。夫で忘れてしまうこともあるかもしれないけど、忘れてしまうことをむりに覚えているより、動いて、自然に胸に残ったものを大事にしてあげる、夫丈でいいんだと思うよ」
私の胸には愛と幸福が残っている。日々、大きくなっているのを感じる。希美子は心臓の鼓動を聞いた。

## 十一

脈搏が早くなった。頭に血が上るのを感じる。つい言っていた。

「私のこと大事？」

甲斐は気怠そうに横を向いた。

「大事だよ」

テレビの音だけが虚しく響く。呼吸が浅くなっているのが分った。

「大事だったら……」

発作的にテレビを消す。テレビは即座に死んで、静けさを二人に襲わせる。

希美子の呼吸が響いた。言葉を抑える抗拒いの音。熱く巡る血は音を立てない。

暫らく経って、ベッドに凭れて座った。甲斐は寝転んで雑誌を読み始める。希美子は堪えたが少し泣いた。又少し時間が経った。希美子は立ち上って、夕飯の後片付けを始める。

別々にシャワーを浴びた。希美子がシャワーを終え、髪を乾かすのを確認すると、甲斐は無言で電気を消した。甲斐が奥で、希美子が手前だ。二人はベッドで身動ぎもしなかった。又少しの時間が経つ。甲斐が寝返りを打って希美子に背を向けると、希美子は服をつまんで引く。

糸かに反応がある。

「ごめんね」

又希美子は泣いた。

「ごめんなさい」

甲斐は緩慢に振り向くと、希美子を抱いた。口づけをして、柔らかな肌に手が伸びる。

初めてけんかをした時のことを希美子は覚えている。二人で遊ぶ約束をしていたのに、甲斐が忘れて予定を入れてしまった。しかも夫は二人が付き合って二カ月の記念日だった。希美子は自分が記念日を大切にする人間だと知らなかった。付き合った日、初デートの日、手をつないだ日、キスをした日などあらゆる記念日を拵らえる

女性の話しを聞いて、気味が悪いとさえ思った。自分の中に大切な、折れない心がないから左んなものに依存するのではと疑がった。

然し付き合ってみると、其記念日が気に懸った。二人は九月二十七日に付き合ったので、カレンダーや、手帳で二十七という数字を見ると心臓が教えてくれた。ついで幸福感が満ちた。初デートの日や手をつないだ日は夫程でもなかったが、初体験の日も本当はちゃんと覚えていた。然し夫を甲斐に言うのは恥しく、せめて、つき合った日ぐらいは覚えてくれているだろうと思った。

夫が二カ月目にしてあっさりと破られたので、希美子は深く傷き、憤おった。一カ月目の時はおいしいイタリアンの店を予約してくれていたので、尚更だった。

「きのうはごめんね」

翌日家へ来た希美子に甲斐は言った。

「友達が急用って言うんでつい」

「そう、急用じゃ仕方ないね。どんな急用だったの」

「そいつ、ばかだからさあ、今日彼女の誕生日なのにきのうになってプレゼント用意してないって慌て出したんだよ。『今日中にプレゼント見つけなきゃ殺される』って焦りまくっててさ、夫ならもっと早く準備しとけって言ったんだけど、そう言ってても仕方ないから一所にプレゼント探してあげたってわけ」

甲斐はハハハと笑うが希美子は笑わない。

「そう、彼女さんにとって大切な日だったんだね」

「そうそう、何せ誕生日だからね。でも何かほかにも誰か同じようなミスした奴いたよなあって考えてたら、なんとそいつ去年も同じことしてるんだよ。土壇場になって慌ててていつも俺が巻き込まれるの。成長しない奴だよなあ」

「そう、去年も」

「そうそう、去年もなんだよ」

「じゃあ事前に注意して上げればよかったんじゃない。そろそろ誕生日だけど用意してるかって」

「あー、いや、そうは言っても他の彼女の誕生日だからね、ほら、別れる可能性だってあるし仲々そこまではねえ」

「そう、怜くんは常に別れる可能性のこと考えてるんだね」

「いやそういう意味じゃ……」

甲斐はいつもと様子の違う希美子にたじろぎ、希美子はこんな意地悪い詰問をしたい訳じゃないと思いつつ抑えられなかった。

「ねえ、他の彼女の誕生日と私達の記念日どっちが大切」

甲斐は一瞬訝しげな顔をした直後に答えた。

「大切なのは勿論記念日だよ。俺と希美がつき合った思い出の日だからね。ただ、そいつ、本当に優柔不断でさ、一人じゃいつまで経ってもプレゼントの一つも決められないんだ。本当に夫が終ったらすぐ希美の所に行こうと思ってたんだよ。でも、夜遅くまでかかっちゃって、そいつのせいにするつもりはないけど本当にごめん。ねえ希美、怒ってる？」

希美子の目から涙がこぼれた。

「怒ってないよ。怒ってないけど、夫にしたって電話ぐらいできるでしょう。夜遅くまでかかったって、精々お店が開いてる八時ぐらいまででしょう。十時になっても、十一時になってもいいから、会いに来て欲しかった……」

希美子は自分がこんなに簡単に泣くとは思っていなかった。一瞬だけ見せた甲斐の怪訝な顔で、ああ忘れていたんだという事が分ると、涙が速く多く流れた。甲斐は「ごめんね」と言い希美子を抱き締めたので、愈歯止めが利かなくなった。

一通り泣くと「本当は今日来るお店も探してたんだ」と言ってとてもきれいなレストランへ連れて行ってくれた。然し本当に探していたのか、元々知っていたのかは確かめられなかった。

希美子には昔しから詰問癖があった。相手の論点の綻ろびを見つけると、問い詰める。夫で関係が切れたことも一度や二度でなかった。

ここ一年程は其癖が出ないので、直ったのかと思った。或は自分が大人になったのかと。夫が甲斐とつき合ったら途端に顔を出したので驚ろいた。

甲斐が待ち合せに遅刻した時メールを送ってきた。

「ごめんね、電車が遅れて五分遅れます」

然し甲斐が到着したのは十分後だった。

「ねえ、五分って言ったよね。どうして五分って言ったの？　ちゃんと電車が着いてからここまで来る時間のことも考えた？　夫に電車が遅れたって言ったけど、調べたら遅延情報出てないよ。単に乗り遅れただけじゃないの」

いつも言い始めた途中で気づくので、とめられなかった。甲斐の顔が面倒臭そうに歪むと尚更だった。詰問癖は、単に刺激されなかった（刺激に鈍くなった）から出なかった丈であること、時間さえ経てば、人は自動的に大人になる訳ではないことを知った。

詰問癖は焦り始めると顔を出した。焦るのは、いつも、蔑しろにされたと感じた時だった。蔑しろにされるのは、大切にされていないからだという連想があった。大切にされたかった。好きな人に大切にされたかった。大切にされていない、されなくなると思うと焦った。

付合って三カ月が経ち、四カ月が経つとけんかの回数が増えた。仕事の後は略毎日一緒に帰り、泊っていくことも多いので、一所にいる時間が多すぎるのが原因なのかと考えることもあった。週末は常に一所だった。夫を甲斐が面倒に感じているのかもしれなかった。

甲斐は最初よくそとへ連れて行ってくれた。希美子がどこそこへ行きたいというと、俺も興味あったと言ってくれた。希美子は自宅でいいじゃんと抵抗することが増えた。出かけるにしても、家の近所を散歩した。どうせ散歩するなら、行ったことのない公園で散歩したいなと希美子は思った。

部屋も雑然としていた。希美子は几帳面なので、事ある毎に掃除

する。希美子は只自分が気になるから掃除する丈のことで、どうして私が、や汚ならしいといった事は考えなかったが、甲斐が「一人暮しの男の部屋なんて此んなもんだよ」と言い訳の様に言うのが嫌だった。

その日は泊ったので、朝一緒に会社へ行った。きのうの夜からけんかせず、和やかだったのに、電車を待っている時のどちらかの一言で途端に険悪になった。思い出すことさえできない些細な一言。会社に着くまで夫から一言も交さなかった。

希美子は、もうむりなのかな、と考えたくなかった。頭を過る其言葉を憎んだ。私が悪いんだから私が変ればいいんだ。その言葉は自分を追い詰める丈で成長の足掛りにはならなかった。

希美子は甲斐の部屋に一人でいた。気付いたら、眠っていたらしく、部屋が真っ暗になっていた。頬には涙が乾いた痕があった。携帯の画面にはメールが表示されている。

「今日は帰らないから」

其言葉への返信を考えている内に眠ったのかもしれなかった。カーテンだけは漸やく閉めたが、電気を点ける気力は湧かなかった。又ベッドにもたれてぼうとする。

今日は付合って五カ月目の記念日だった。前回と、違うことは、甲斐が自分の意思で記念日を過さないことを通達して来たことだ。もう日付は変ろうとしているが、お腹は減らなかった。希美子の頭は痺れて朦朧とした。

鍵の開く音がした。心臓がどきりと脈を打った。全身は疲れて動かないのに心臓だけが動いた。

「ああ、いたんだ」

電気を点けた甲斐は心底驚ろいたようだった。一呼吸とってから左右言った。

「電気ぐらいつけなよ」

甲斐は言いながらテレビを点けた。帰ると一番にテレビを点ける、甲斐の癖。

「今日は、帰らないんじゃなかったの」
「意外と、早く解散になってね。電車にのれたから帰ってきた」
甲斐は座ってテレビに向った。電気が点いていなかったから、家に入ったのだろうか。電気が点いていれば駅前のまんが喫茶に入る予定だったことも十分に考えられた。
テレビからばか笑いが聞えた。合せて甲斐も少し笑う。私は。私は、左様なものを見て笑う貴方を見たくない。
「わかってたんだよね、今日のこと」
「……」
「わかっていて帰らないって言ったんだよね。分ってる」
忘れていたと言って欲しい丈の自分の愚かさが分った。
「私は、大切じゃなくなっちゃったんだよね。そうさせたのは私なんだよね、ごめんね」
「……」
「私は、大切にして欲しかった。私のことが一番で、何よりも誰よりも大切にして欲しかった。貴方の一番になりたかったの。ねえ、一つだけ教えて。私のこと好きだった」
「……」
「教えてよ。最初、私のこと、本当に好きだった」
甲斐は深いため息を吐いた。あきらめるように「好きだったよ」ぽつりと呟く。
「今は？」
「……」
「今は？　ねえ、教えてよ」
「……」
答えない甲斐に苛立ちが募った。夫以上に、焦りが高まった。まだ、まだ、好きの一言がもらえればやり直せる気がした。甲斐は答えなかった。
「ねえ！　どうして黙ってるの。答えられない、気もちの整理がつかないから黙ってるの？　夫とも本当の気もちを言うのが嫌で黙

ってるの。私のこと面倒な女だと思ってる？　私の、嫌な所いっぱい見て、好きな気もちがなくなっちゃった？　教えてよ。はっきりさせてくれたら、私、出ていくよ。ここから、私、出ていくよ」

しゃべればしゃべる程しあわせがなくなっていく。あの幸福な時間が、温かさが、この冷たい空気に溶けていく。希美子は夫に抵抗したかった。なくしたくなかった失ないたくなかった、まだ取り返せる筈だと信じた。

夫でも甲斐はしゃべらなかった。テレビの雑音が希美子の感情を乱した。相手の言葉を待つという、夫丈のことが希美子にはできなかった。

「テレビ消してよ！　何でいつもテレビつけるの。私のこと見てくれないの。私のこと見て欲しいって、私は私の希望を伝えてるじゃない。あなたの希望を伝えて欲しいの。どうして欲しいって、今何を考えてるって、拙なくても伝わらなくてもいいから伝えようとして欲しいの。それそんなに難かしいこと？　私むりなこと言ってる？　ねえ、テレビ消してよ！」

漸やく甲斐はテレビを消した。漸やく希美子のことを見た。「別れよう」つぶやくように希美子に告げた。

希美子は泣かなかった。泣いたのは電車にのってからだった。最終電車のアナウンスが遠くに聞えた。

## 十二

「ねえ、聞いた」

同期の子が躁然ぐように言った。

「十波さん、ついに異動らしいよ」

部署の話題は夫で持切りと言って好かった。十波が此所迄話頭に上ることは初めてと言っていいだろう。夫もさみしいなと希美子は思った。

別の支社へ行くという。「その支社かわいそう」「やっと追い出

せる」「でも部長前から散々訴えてたらしいよ」部の人は先輩後輩問わず集まって話した。

形式上、送別会を開くことになった。露骨に欠席する人はいなかったが、単に飲むいい口実ができたという理由で参加する人ばかりだった。

希美子も参加すると伝えたが、是と言って感慨がある訳ではなかった。どちらかと言うと気後れする様な気もちがあった。甲斐とつき合った直後に何度か飲みに誘われた時すべて断わった。夫から一度も誘われていないので半年近く飲みに行っていないことになる。その間に起きた物事の濃さを考えると十波が丸で他人の様に感じられた。

つき合っている時は十波のことなど丸で考えなかった。仕事の上で話すことはあったが、その印象は一瞬で消えた。別れた後は、少し考えることがあった。よく飲みに行っている時言われた事を思い出した。

「どうして私誘うんですか。一人で飲みに行ったらいいじゃないですか」

直言する希美子に十波は言った。

「一人はさみしいだろ」

その時は言われて何とも思わなかったが、別れた後では、少しわかった。当り前にあったものを喪失した感覚。希美子は一人に慣れていたし、不足も感じなかった。だから甘ったれているんだとさえ思った。夫が、一人でいると、さみしくなった。

だからと言って別れてから又十波と飲みに行こうとは思えなかった。元々自分から望んで行っていた訳でないし、自分自身のことさえ、半年前と比べて丸で他人のように感じられるのに、他人の十波は夫以上に他人になって仕舞った。

送別会は居酒屋で行われた。挨拶の機会を与えられた十波は長々と喋舌った。途中までは聞いていた部の人も段々騒擾き出し後半は殆んど聞いていなかった。夫でも十波は自分が過した八年を振り返

り涙ぐんだ。

送別会中希美子は同期の子と十波に挨拶に行った。交したのは二言か三言だった。

送られる人によっては二次会三次会が当り前にあるが、その日は一次会でお開きになった。十波の送別会であるのにいくつかの集団はその儘二件目へ向っていった。十波は帰宅する人と一緒に帰った。

感傷的な気分になっていたのか、十波は同じ方向の電車にのった後輩数人に車中喋々と喋舌った。後輩はふんふんと聞いていたが自分達の降りる駅になると「それじゃあ十波さん、本当にお世話になりました」と爽やかに帰った。最後には希美子と十波が残った。十波は、希美子にはぺらぺら喋舌らなかった。二人は静かに電車にゆられた。

希美子の降りる駅が近いた。駅名を告げるアナウンスが流れる。夫が終ると、十波が言った。

「よかったら、一杯飲んでいこうぜ」

希美子は笑った。

「始めてよかったらなんて言いましたね」

降りた十波はきょろきょろした。

「おれ、この駅降りんの始めてだよ。勿体ないなあ、定期の範囲内だった間に来ればよかった」

「定期から外れても、来ればいいじゃないですか。まあ住宅街だから何もありませんけど」

地元のため勝手を知る希美子は安い居酒屋に這入った。騒しかったが、十波はこっちの方が喜こぶだろうと思った。

「ついに異動か」

酒を口に銜んで十波がいう。

「お疲れ様です」

「長かったなあ、あっという間だった気もするけど。お前も、勤め始めてもう一年か」

「そうですね」

話してみると、違和感なく話せることがふしぎでもあった。
「そう言えば、お前と、中尾ちゃんとで飲み行ったんだよな、最初」
「ああ、左右でしたね」
「中尾ちゃんとは未だに仲好いの、そう言えば」
「今は全然。仲悪い訳じゃないですけど、グループが違うっていうんですかね、派閥というか」
「派閥か」
「女の子は大変なんですよ」
「中尾ちゃんかあ、おれ中尾ちゃん抱きたかったんだよなあ、今だから言うけど」
「最低。十波さん、左右言う配慮が足りない発言控えた方がいいですよ、今だから言いますけど」
「そうか」
十波はたばこを吸った。手元にあった灰皿を、十波の方へやる。
「そう言えば、聞きたかったんですけど、十波さん仕事中だとくねくねしてるって言うか、話し方いつもと違いませんか。あれなんなんですか」
「いや、夫は仮にも仕事中だからさ、周囲に気を遣ってる訳よ。おれも色々大変なんだよ」
「あれで気を遣ってるんですか」
苦笑した希美子を十波はふしぎそうに見た。
「中居、少し感じが変ったな。これが恋の力か。すごいもんだな」
「ほら、又デリカシーないことを言う。私別れたんですよ、そこは気を遣って下さいよ」
「えっ別れたの。ごめん知らなかった」
「あっ知らなかったんですか」希美子は早口になった。「まあ別れたって言っても一カ月も経ってないし、そうですよね知らないですよね。いや全然大したことじゃないですけどね」
「どっちがふったの」

「まあ、私が、ふられました。いいじゃないですかもう」
「未練とかないの」
「未練なくはないですけど、いいんですもう。私にとっては大切な経験でした。これからも、ずっと、大切だから夫でいいんです」
「ばかだな」十波は烟を吹いた。「これからなんて、分らないだろ。時間がすぎて、ずっと大切だったことならあるだろうけど、これからも大切かどうかは今は分らないだろ」
「大切なんです」希美子は怫然になった。「それぐらい、色々あったんです。十波さんには分らないでしょうけど」
「そうだな」
希美子は言いすぎたと思ってはっとしたが、十波は存外平気だった。其話しになると、未だに動揺する自分が情なかった。
其後暫らく話しをして、店を出た。希美子は最後に挨拶した。
「仕事の上でお世話になった覚えは余りありませんが、本当にお世話になりました」
十波は苦笑した。
「お前もその言いすぎる癖直した方がいいよ。じゃあ、今までありがとな」
十波は言って改札を抜けて行った。其背中を見ていると、ふいに甲斐がいつもみえなくなる迄見送ってくれたことを思い出した。
希美子は必らず一度だけ振り返った。甲斐は必らずそこに居て、希美子へ手を振ってくれた。希美子は振り返るが誰もいない。雑沓の音が、自分が一人であることを思い起させる。一人はさみしい。
希美子は独語いて、肌寒い夜の中家に帰った。